



アメリカ帝国主義者に勝利したチョソン人民軍の勇士

第 21 号
1972. 9

書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会

吹田市千里山東3-10-1
TEL 388-1121
内線 776

■ 講演記録

- 3 経済学批判と弁証法
——ヘーゲルとマルクス—— (上) 細見 英

■ 書評

- 12 「ニヒリスト」
——テロに突進する否定主義者たち—— 陸井 四郎
15 高橋和巳の二短編より 小川 富雄
17 金史良作品集 ——人と作品—— (I) 田所 信吉

■ わたしの研究ノートから

- 22 日中文化関係史の一面 (Ⅲ) 増田 涉
24 台湾ノート二章
——耕者有其田と霧社事件—— 市原 亮平

- 2 ■ 巻頭言 ——自転車経済—— 西岡 孝男

題字は網干善教文学部助教授
カット写真は「朝鮮画報」(1972)より

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

日本経済は、自転車経済だ、という人がある。平衡を保つためには、前に向つてとび出していかねばならない。事実、日本の自転車は、倒れるほどスピードをゆるめたことではなく、よるめきはしたものの、そのたびによりたくましく成長のコースをたどってきたのである。

一九六〇年、時の池田首相は、所得倍増計画を発表した。十年間に国民の所得を倍にするというヴィジョンを提示したのである。人々は、大風呂敷、だといったものだが、日本の自転車はスピードをあげてはしりはじめた。池田内閣、パトンを引きついだ佐藤内閣は、輸出競争力の強化に、あらゆる経済政策を集中した。明治百年である一九六八年に日本のGNP（国民総生産、名目）は、一四二〇億ドルとなり、西独を抜いて三位にのし上った。いまや物質およびサービスの生産価値で日本より高いのは、アメリカとソビエトだけなのである。かくて、一九七〇年に、名目的に所得が倍以上になったことを誰も否定するものはない。

昨年八月、ニクソン声明が発表されたとき、日本の貿易の前途について、悲観的な見方が多かった。しかし、十二月に円の切上げが行なわれたころ、回復の軌道をすべり出した。貿易の黒字は多くなる一方である。

『日本株式会社』、『第三の大国日本』など、最近の書店の店頭には、日本の高度成長ぶりに注目した外国人の研究書がいくつか並べられている。日本はいつの日か、GNPにおいてソビエトを追いこし、アメリカの首位の座さえおびやかすだろう、というのである。しかし、今日すでに、東京、名古屋あるいは四日市、大阪の大気汚染は、世界の最高水準のものである。「人口の三三％が国土の一％に住む」過密の実情にあることは、田中総理の『日本列島改造論』の指摘するところであるが、「過密と過疎の同時解決」をわらったこの改造論の意味するところは、いぜん重化学工業偏重、輸出第一主義であり、高速交通ネットワークを使つての、過密地の工業の再配置である。対外競争力強化のために安価な用地・用水をもとめて、日本列島の北東、西南の後進地域に臨海大規模工業基地を構想している。公害の分散、過密の移転に他ならない。

こちらへんで、自転車を止めてみることを考えねばなるまい。日本中に、光化学スモッグやらヘドロのたれ流しをばらまいてどうなるというのだろう。GNPが世界第一位になったとて、瀬戸内海がドブの悪臭を放つものに変りはてていたら、経済成長に何の意味があるのか。数年前まで、晩夏ともなれば、関西大学の校庭の空に、無数の赤トンボがとんでいた。今は何処へ行ってしまったのか、ほとんどみることはできない。

（西岡孝男・工学部教授）

経済学批判と弁証法（上）

——ヘーゲルとマルクス——

細見 英



マルクス



ヘーゲル

経済学部ではこの四月より、経済学原論担当
者として細見英助教を迎えた。本稿は、
五月十二日の午後「経済学会・商学会・経
済学部ゼミナール協議会」の三者共催でおこ
なわれた講演の草稿に、加筆されたもので
ある。

関西大学にまいりまして早々に、由緒
ある経済学会・商学会の定期講演会で、
ゼミナール協議会の皆さんの共催をもち
ただいてお話しする機会を与えられました
ことを、光栄に存じます。

「経済学批判と弁証法」と題して、私
がこれまで勉強してきましたことの一部
をお話して、ご検討に供しようと思うの
であります。

「経済学批判」の意味

「経済学批判」——Kritik der po-
litischen Oekonomie、英語流でい
いざすと Critique of political eco-
nomy であります。これは、マルク
スの主著『資本論』の副題につけられ
ている言葉であります。また、『資本論』
（その第一巻は一八六七年に出たのです
が）に先だって、一八五九年に刊行され
たマルクスの独立の著作の書名でもあり
ます。さらにさかのぼりますと、マルク
スが若い時代に——二六才であった一八
四五年の二月に、かれは『政治と國民経
済の批判』Kritik der Politök

und Nationalökonomie と
いう標題で二巻本の本を出す計画をたて
まして、出版社と契約をとり結んでおり
ます。この本は、当初計画された形では
出なかったのですけれども、一八四八年
の革命、ロンドンへの亡命などの波乱を
へて、ついに実現されたのが『資本論』
であったといえるわけでありませう。

したがって、マルクスが生涯をかけてやり
あげた仕事——実はかれは、みずから構想
していた計画の、ほんのごく一部分しか
実際にはやりとげていないのでありませ
うけれども、とにかくそのマルクスがおこ
なおうとした仕事、その全体を、「経済
学批判」と名づけてよからう、と私は考

えます。

ところで、「経済学批判」はこれまで申し上げてまいりましたが、しかし「Kritik der politischen Oekonomie」といふまゝで、これには二重の意味があります。と申すのは「Politische Oekonomie」あるいは「Political Economy」は、「一」には「政治経済学」という意味がある。これに対する批判といふは、それはスミス、リカードらの古典経済学を批判的に継承し、あわせて俗流的なブルジョア経済学を批判する——そういう、まさに「経済学の批判」という意味がこゝにあります。しかし同時に、「Politische Oekonomie」は、現実の政治経済そのもの、経済政策、政治経済体制・制度、そうした現実の政治経済そのものという意味もあるわけでありまして、マルクスの仕事も「Kritik der politischen Oekonomie」と名づける場合、それがかれに先行する諸理論の批判であると同時に、理論の基礎をなしている現実のブルジョア的な政治経済体制そのものの批判でもあるという、この二重の意味合いを、確認しておくべきであらうと思ひます。

マルクス主義の三つの源泉と三つの構成契機

ではそのような、ブルジョア社会、そ

の政治経済の現実そのものと、それを反映しあるいは弁護するところの理論とにたいする批判は、どのような立場で、どのような原理にもとづいておこなわれ、どのおののか——マルクスの政治経済学ならびに政治経済学の批判の構造を問うことは、マルクス主義の構造全体を問うということになつてまいります。この点につきましては、マルクスの死後三十年——マルクスは一八一八年にドイツで生まれ、一八八三年にロンドンで死んだのでありますが——その三十周年にあたる一九一三年に、レーニンが「マルクス主義の三つの源泉(三つの構成部分)」という論文を書きまして、そのなかで次のように言っております。

「マルクスの学説は、人類が一九世紀に、ドイツ哲学、イギリス経済学、フランス社会主義といふかたちで作りだした最良のもの、正統の継承者である。」またその翌年に書かれた「カール・マルクス」という論文のなかで、

「マルクスは、人類の三つのもっとも先進的な国に属する、一九世紀の三つの主要な思想の潮流の、継承者であり、天才的な完成者である。この潮流とは、ドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学、および、一般にフランスの革命的諸学説と結びついたフランス社会主義である。」——このように書いております。

レーニンのこの指摘は、まったく正しいものと私は考えます。カント、フィヒテ、そしてヘーゲルにおいて完成せられたドイツの古典哲学。スミス、リカードを頂点とするイギリスの古典経済学。および、バブーフ、サン・シモン、フーリエ、それにイギリスのロバート・オーウエンも加えるべきでありましたが、これらの革命学説ならびにそれと結びついた社会主義の思想と実践。これら三つの流れがマルクス主義の源泉をなし、そして三つの構成部分ないしは契機をなしている——これは、確かに言えることでもあります。

とすれば問題は、こうした三つの流れ、思想的潮流を、マルクスがどのように受けつぎ、そしてどのように結合しておるのか、ということになります。マルクス主義には哲学もあれば経済学もある、社会主義もありまふと、そんなふうに並列的・羅列的にとらえるべきではなくて、それらは結合されて一つの統一的な実践的思想体系になつてゐる。海本克己氏はこれを、マルクス主義における「哲学と経済学と社会主義」の、あるいは「思想と表現だと思ひます。まことに適切な表現だと思ひます。とすれば、その「三位一体」の、その結合統一の原理はなにか、また、体系的な統一の構造はどうか、

っているのか、ということが、問われてしかるべきでありましょう。そしてこの問題は、マルクスの思想形成過程をあとづけることによつてはじめて、明らかにされるであらう——このように私は考えます。

人間解放の思想としてのヘーゲル哲学

マルクスの思想形成の出発点であり地盤をなしておりますのは、ヘーゲルの哲学であります。ドイツで生まれ、ベルリン大学に学び、その急進思想のゆえにドイツを追われてパリにあるのはベルギーに移り、そして一八四八年革命の挫折のちはロンドンに腰をすえたマルクスであります。そして、ヘーゲル哲学との全面的経体的な対決は、生涯にわたつてマルクスが、みづからの課題としたところでありました。

マルクスのヘーゲルとの連関といへば、「弁証法」がとりあげられるのが常であります。しかしながら私は、そのまゝに、「人間解放の思想」としてヘーゲルの哲学がマルクスによつて受けとめられたという点に、注目する必要があるのではないかと考えます。人間解放の思想としてのヘーゲルとマルクスとの継承と批判、この本筋をおさえることなしには、弁証

法をめぐるヘーゲルとマルクスの関係も、明確にならないのではないかしら思ふのです。

ヘーゲルは観念論哲学者であります。かれは、人間・社会・歴史と自然のいっさいを貫くところの本質を、精神的なものにとらえました。そしてその精神的なものが実在を、自然や人間を生みだして、そこにおいて自己を実現し、自己を自覚していく—その発展の運動の全過程を描きあげたのが、ヘーゲルの哲学体系であります。それは、「論理学」「自然哲学」「精神哲学」の二三の部門からなるわけですが、精神あるいは理念—この運動をつらぬく主体であり実体であるものをヘーゲルは「イデー」「理念」と呼びます—この理念が、天地創造以前の神の国において展開しているその運動、理念の純粹な運動法則を叙述したものが、「論理学」であります。ところが、こうした純粹な理念というのは、まだ抽象的なものであって、理念はみずから運動によって実在を、自然や人間をつくり出してゆくのである。純粹な理念が自己を疎外して、自然の領域において実在を、現実の姿をみずから帯びさせてゆく。その疎外の領域における理念の運動、これを展開するのが「自然哲学」であります。ところで、この疎外の領域から理念は、みずから回復していくの

であつて、この理念の自己還帰、疎外からの回復過程に、人間のあらゆる営みが展開される。この過程の叙述としての「精神哲学」につきましては、主観精神から客観精神へ—客観精神のなかで社会や国家の問題も扱われます—そして芸術・宗教・哲学をその内容とする絶対精神へと高まってゆく。この絶対精神、その最後に到達する哲学は、最初からいたイデーが、みずからのうちにはらんでいた諸契機を自己運動によって外化させ、その外在態が自分自身にはかならないといふことを自覚することによって止揚して、みずからを自然・人間のいっさいの営みをふくんだ全き具体的なものとして形成・実現・自覚したものである。最後は最初の出发点に戻る。ただし、まさしくこうした円環の運動を経由することによって、中身は具体化され豊富になつておるのだ—このように説くのであります。こうしてヘーゲルは、この円環的な哲学体系によって、自然・人間・精神いっさいの領域を把握し、自負したのであります。

この絶対精神、イデーの歩み、その総体としてのヘーゲル哲学体系—これは、神が自然と人間を創造し、これを完成させてゆくプロセスの叙述であります。が、見方をかえれば、ここで描かれているのは完成した人間、神の立場にまでみずか

らを高めた人間の自己運動を叙述したもので、ともいふことができます。眼前に見いだす自然に働きかけ、これを自らのものとすて獲得していく運動、人間と人間との対立・矛盾をみずから生みだしつつこれを止揚してゆく運動、こうして自然と人間関係のすべてを、自分の意志と活動をつらうじて人間のものに改変し獲得し、しかもそのことを自覚しておる人間の境地、こうした境地に高まった人間の運動を描きあげたもの、と云うことができます。ヘーゲルが考えたところの全き人間、人間の自由が、自然・社会をつらうじて完全に実現せられたそのありさま、これをヘーゲルは、かれの哲学体系として描きあげておるわけでありす。

ただし、ヘーゲルの場合、人間自由の実現が、たんに思想の王国、観念の領域においてなすとげられているにすぎず、自然としての自然、物質的存在そのものは、ヘーゲル哲学体系の外にある。しかも、現にある自然、物質的存在を前提としながら、これが意識されるやその物質的存在性は止揚されるという、あるいは、現にある物質的存在に精神が乗りうつるにすぎないのに、これを精神が物質的存在そのものを産出すると言ひくるめる、観念論的神秘化の手法がとられてはいるわけでありまして、この点は、フォイエルバッハがするどく指摘し、マルクスもそ

れに依拠してゆく批判的論点であります。とはいへ、こうした基本的な問題性をはらみながらも、そこで描かれているのはヘーゲルなりに考えられた人間自由の全き実現の姿であるといつてよからうと思ひます。そしてヘーゲルは、こうした人間の全き自由が、すでに現実に実現されておると説いたのであります。

マルクスの思想的出发点

ところでマルクスは、その出发点において、ヘーゲルの描きあげた人間自由の全面的実現というイデーを、受けいれているといつてよいと思ひます。ヘーゲルと違ふところは、こうしたイデーはいまだ実現されていないという認識—現在ある世の中、社会は精神不在の非理性的な現実であつて、プロイセンの絶対主義的な専政に端的に表わされているように、人間自由を圧殺する専制的・非理性的なありようではない。この現実を批判し変革して、ヘーゲルの描きあげるような人間自由の全き実現を、現実に達成しなければならぬ、という課題意識でありました。「イデーを基準にして現実を測る、現実を批判する」とマルクスは言っておりますが、そのさい現実批判の基準としてかけられるイデーは、ヘーゲルが描きあげたような、自然と社会の

いっさいを自己のものとして生みだし、そこにおいて自己を確証しているような、そういう人間の全き自由の表現、そうしたイデーであったと言つてよい。ヘーゲル哲学に依拠しながら、これを勇猛批判の武器にくみかえている。この意味で、「急進的ヘーゲル主義」radikal at Hegel-alismus、これがマルクスの出発点の立場である。このように私は考えます。大字を出て、『ライン新聞』の寄稿者の中にはこの新聞の主宰として、マルクスは健筆をふるいます。ライン州議会の討論の批判、政治や法制の批判にあてた非常にすごい論文を、続々と発表しております。が、のちに『経済学批判』の序言のなかで、当時をふりかえつてマルクスは次のように語っています。——当時、自分は二つの問題に直面して、これについてはそれまでの自分の研究では、明確な態度をとりえないことを悟られた。ひとつは、「物質的利益にかんする問題」すなわち経済的な問題であり、もうひとつは、フランスの方から聞こえてきた、哲学に淡く色どられた社会主義・共産主義の問題である。この出来さもないに自分は反対した。しかしながら、これまでの自分の勉強では、はっきりと断定的な態度をとることができないことを卒直に告白せざるをえなかった。そこで、『ライン新聞』にたいして権力の側

から加えられた強圧を逆手にとつて、公けの舞台から書斎に退いたのである、と

「ヘーゲルの『法の哲学』」

書斎にもどつたマルクスが最初に手がけた仕事は、ヘーゲルの『法の哲学』の批判的検討でありました。ヘーゲルの『法の哲学』は、狭い意味での法律の哲学ではありません。法律という形で固定化されるものの基礎にあるところの、人間の社会的関係の法則性の把握、これが、『法の哲学』の問題です。それは、哲学体系のなかの「精神哲学」のうち、第二部の「客観精神」の部分を拡充して、独立の書物として一八二二年に刊行されたものであります。客観精神、自己を客観的に実現する精神、それはまた、「自由な意志」であるとヘーゲルは言うのですが、その自由意志の自己展開過程——自由意志のない手たる人と、それが自己を客観的に実現するところの物との連関、そしてこの物を介しての人々との連関、これが、『法の哲学』でとり扱われる対象であります。

「抽象法」というのは、自由な意志が物において自己に定在を与え、自己を客観化しない自由意志というのは抽象的な不完全なものであつて、自己を物に客観化する。それはさしあたり「占有」であります。この物が、あいつの物という社会的承認を受けなければ、占有が「所有」となり、そして所有を獲得することによつてはじめて、自由な意志は独立の「人格」となる。所有は本来、私的所有であり、私的所有者にしてはじめて独立の人格たつらうと、ヘーゲルは考えます。したがつて、『法の哲学』では最初からヘーゲルの念頭には近代市民社会があり、そこにおける人と人、人と物との間にも抽象的な関係を、第一部で展開しておるのだと申せましょう。すなわち、「所有（第一章）から「契約」（第二章）へ、そして所有と契約の侵害ないしは不履行としての「不法」（第三章）へとという順序で、章の展開がおこなわれています。ところで第一部では、物を介しての人々との連関が、物の側面に即してみられるところが、そうした所有・契約関係にある人間が、人間相互の関係を自己の内面に反省する、この主観的側面の展開が、第二部の「道徳」であります。そしてこの両面、すなわち客観的な面と主観的な面との統一が「人倫」である、と述べまして、第三部「人倫」を、

これまた三つの章——第一章「家族」、第二章「市民社会」、第三章「国家」に分けて展開しておるのであります。

家族は、他の家族にたいしては一個の私的所有者であるけれども、家族の内面では共同の財産を基盤にして、夫と妻、親と子といった、直接的な血のつながりの人間関係がある。家族においては人と物、人と人との、直接的な統一においてある。ヘーゲルは哲学的に抽象化して、特殊性と普遍性との直接的統一というふうな言つておりますが、この場合、特殊性の契機というのは個人、普遍性というのは、人間と人間との共同性と理解してよからうと思ひます。家族においては個人と、それから人間と人間との共同的関係とが、矛盾なしに融合しておる。ところがこの直接的同一性が解体して、各個人が独立して自分の所有にもつて自己を主張する、自分の私的利益を追求してゆく——こうして特殊性が自立化して、エゴイズムをむきだしにして行動する場面、これが「市民社会」であります。市民社会は「分裂性の段階」、対立の段階であつて、特殊性が自己を主張してゆく。しかし、だからといつて社会的共同性はなくなつてしまつてはなかつて、疎外せられて、外的形式的な普遍性として存立する。だいたい近代国家というのは、こうした外的形式的な、本来の国家たりえ

ていないものである。このようにヘーゲルは言う。

ところがヘーゲルは、「対立する両極が、同時に中間項でもあること」によって、対立物であることをやめて全体の有機的な繋がりとなるということが、最も重要な理論学的洞察に属する」と申します。分裂・対立、そこで事柄が終つてはならないのであって、対立している両極、そのそれぞれが同時に中間項でもあることによつて、対立が媒介され融和せられて、最初の統一が回復される。最初の統一を「肯定」とすれば、第二は「否定」の段階。そしてこの否定のうちに肯定的なものが認識されて、全体の統一が回復せられる。これが「否定の否定」の段階。あるいは、最初を「即自 *es ist*」とすれば、第二は「向自」もしくは「対自」 *für sich*。そして最後の第三段階が「即かつ向自 *es ist für sich*」と呼ばれる論理的発展段階であります。そして、肯定的なものうちに肯定的なものを見いだすこと、これこそ弁証法における最も重要な契機である、とヘーゲルは申しまして、これを「思弁的なもの」「弁証法における思弁的なもの」と呼ぶわけでありませう。

さて、「市民社会」は否定の段階、対立の段階である。そこでは特殊性と普遍性が相互に対立して、疎外の状態にある。しかし特殊性の運動そのものをとり上げて人間の社会的共同の運動が進展させられ、こうして特殊性の運動の底を流れる普遍性、普遍と特殊の統一、個人と社会はもつとたれたつたといつことが、自覚されてゆく。これによつて市民社会の分裂性は止揚され、「否定の否定」としての具体的統一が達成される。そこにおいては各人が自分の利益、自分の個性を存分に發揮しながら、しかもそれが社会の共同の利益と矛盾しない。各人の個性の發展と社会全体の發展とが融合しあふ。そういう状態こそ、「倫理」の真の姿であり、こうしたありようを實現しているものが本来の「國家」である、とヘーゲルは説くのであります。

ところでヘーゲルは、こうした本来の國家を「立憲君主制國家」として描きあげます。一院制の身分代表議會（立法權）と首領制（統帥權）、両者を統括するところの君主權——このよりなる構成をもつ國家が、客觀精神の最も發展した具体的なあり方、現象世界における理念の實現を示すのだといふのです。これは、當時のプロイセン國家をそのまま表現してあるものではありませんで、ナポレオン戦争中の一八四三年と一八五一年に、フリードリヒ・ウィルヘルム三世が人民に約束しながら、結局は履行しなかつたところの憲法体制をモデルとしたもの、と言へるようであります。

マルクスの「ヘーゲル國法論批判」

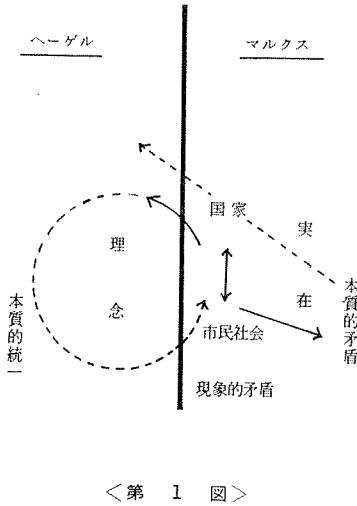
「ライン新聞」から書齋にもつたマルクスは、ヘーゲル「法の哲学」の批判的検討にかかると、最初ヘーゲルの國家論の中心部分である「國內法」の項にきまして、一八四三年の春なほし夏にかけて、詳細な検討を加えておられます。各節を書き写して、これに詳細な分析と批判を加えておるのであります。これがこんにち「ヘーゲル國法論批判」という標題で翻訳されている草稿であります。この「ライン新聞」時代に物質的利害の問題と社会主義・共產主義の問題にぶつかり、これらの問題にどう対処すべきか模索していたマルクスが、まずはヘーゲル國家論の脚を借りて、そこにおける市民社会の矛盾の止揚の論理を検討の俎上にのぼせようとは、自然な歩みであつたと申せましよう。

この草稿でマルクスは、フョイエルバッハに依拠しつつ、ヘーゲルにおける主語と述語（もしくは客語）の転倒を批判します。一八四三年のはじめに發表された「哲学改革のための暫定的提言」のなかでフョイエルバッハは、ヘーゲルにおいては主語と述語がひっくり返つてい

エグゼクティブな部分においてである」とマルクスは言うのです。

こうした主客の転倒、思惟と存在の転倒ゆえに、ヘーゲルの「論理的汎神論的神秘主義」が出てくる。現実の国家・社会はそのものとして問題にされるのではなく、論理的理念の運動を体现しているものととらえらる。論理的理念は正し反し、あるいは肯定・否定し否定の否定という運動をおこなう。市民社会は「反」の、「否定」の段階だ、とすれば「合」、

「否定の否定」を体现している現実的存在がなければならない。これがなければ理念の運動は完結しない。そこでヘーゲルは、大いに「思弁」を働かせて、ドイツ人民の鼻先にぶら下げられた立憲君主制国家こそ、論理的理念の完成形態を体现するものだと言いたわけでありました。これは、主客の転倒にもとづく現存するものの神秘化だと、マルクスは鋭く告発します。そして、これを支えるヘーゲルの「媒介」の論理、さきほど紹介したような、対立物の両極が同時に中間項でもあることによつて対立が止揚せられるという論理の、マヤカシをつくのであります。これは、喧嘩をしているA、Bのあいだに仲裁に入ったCが、またAと喧嘩をおこせばじめて、Bが仲裁に入らねばならぬ。そんな論理ではないか。マルクスは言うのです、「現実の両極は、



〈第 1 図〉

相互に媒介されることはできない。また、それらなんららの媒介も必要としない。なぜなら、それらは対立する本質的なからだ」と、現実のきっぱりした対立のあいだでは、「闘争」による結着があるのみだ、というのであります。

それでは、ヘーゲルの国家論のなかにマルクスが見いだす積極的なものはなになのか、マルクスは、ヘーゲルの思弁的構成と欺瞞的な論理をときどきつづつ、ヘーゲルのうちにある「深い点」をえぐりだします。「ヘーゲルにおける深い点」——これは、ヘーゲルが政治的国家と市民社会との分裂を承認し、これを「矛盾」ととらえてその「止揚」をめざす見地から出発していること。「ヘーゲルは二つの取捨な対立物、二つの現実異なる領域としての、『市民社会』と『政治的国家』との分裂から出発している。たしかにこの分裂は、近代国家においては事実として現存する。……ヘーゲルにおける深い点は、かれが市民社会と政治的社会との分裂を、矛盾と感しているところにある」。

この正当な出発点、正しい事実認識と課題意識をもちながら、しかしながらヘーゲルは、この矛盾そのものの根源を探り、この矛盾の現実的実践的な止揚の道を歩まない。そうではなくて、さきにもたような媒介の論理でもって思弁的に、

すなわち見せかけの上でのみ矛盾を「止揚」して、その現実的体現が「国家」である、というのであります。この点を批判してマルクスは言うのです。「ヘーゲルの主な誤りには、かれが現象の矛盾を、本質における、すなわち理念における統一ととらえているところにある。だが、現象の矛盾はより深いもの、本質的な矛盾をその本質にもっているのだ」。そしてマルクスは、「真に哲学的な批判」の方法を、つぎのように打ちだしています。

「現在の国家制度の真に哲学的な批判は、矛盾の存在をただ指摘するだけでなく、これを解明する。それは矛盾の発生を、その必然性を、概念的に把握する。それは矛盾を、それに独自の意義においてとらえる。だがここにいう概念的把握とは、ヘーゲルのようにいたるところで論理的概念の諸規定を再認識することではなく、独自の対象の独自の論理を把握することである」。

そこで、現実の批判、現実の概念的把握の方法として、ヘーゲルとマルクスの接するところと切れるところとを明示しますならば(第一図参照)、ヘーゲルもマルクスも、国家と市民社会との分裂を矛盾ととらえて、その止揚をめざす立場から出発します。マルクスはこの矛盾を「現象の矛盾」と特徴づけるわけですが、しかしそこから出発しながらヘーゲルは、

この矛盾は本質において、理念においては統一しておるのだ、理念においては普遍性と特殊性とは統一しておるのだ。その本質的な統一物が自己自身を除外して、みずからの分裂性の段階、否定の段階として生みだしているのが、国家と市民社会の分裂である。この分裂の底にある本質的统一が自覚されさえすれば、分裂は止揚されて最初の統一が回復される、とマルクスは、そしてそれが理念の自己運動の一階梯であると解釈され自覚されさえすれば、矛盾は止揚されたことになる。現実にはなにごととも変ってはおきません。

マルクスの場合には、現象の矛盾はその本質に、より深いもの、本質的な矛盾をもつておる。したがって、現象の矛盾から出発して、本質的な矛盾をえぐり出す。そしてこの本質的な矛盾がこう展開してこう現象しているのだということを、その「発生と必然性」を、説明することによってはじめて、現象の矛盾と本質的な矛盾の総体としての矛盾の体系に体制を、現実にも止揚していく方法が明らかになる。マルクスは真の批判の方法として、このように説くわけであります。そうして、近代社会の矛盾が克服止揚されるべき方向として、『ヘーゲル国法論批判』では、

「デモクラティ」、民主主義ということを唱えておられます。

ここでマルクスが言っておりますのは、政治制度としての民主主義ではありません。政治制度というのは、一般に、人間の特殊の個人性と社会的共同性ととの分裂の上において、はじめて、必然的なものとして成り立っておりますのであつて、そうした分裂を止揚して達成されるべき状態として、マルクスは、普遍と特殊との真の統一、あるいは形式と実質との真の統一、そこにおいては「すべての契機が現実になぜ一モス（一人）の契機であり、……国家制度そのものはただ人民の自己規定としてあらわれるにすぎない」ような、こうした社会的人間のありようを、「デモクラティ」と呼んでおるのであります。この「デモクラティ」は、一年のうちに、『経済学・哲学草稿』において「徹底した自然主義、人間主義、あるいは「自然と人間の、人間と人間の争いの真の解決であり、個人と人間の争いの真の解決である」との、「共產主義」という形で、発展させられていくものであります。しかしながら、一八四三年の『ヘーゲル国法論批判』におきましては、この「デモクラティ」の規定は全く抽象的であります。それに、いったい矛盾の総体をどう克服し、どのような道をおかつて「デモクラティ」を実現するのか、その実

現の条件、基礎、担い手、こうした点についてマルクスは、全く語りえておりません。それを明らかにするためには、市民社会の分析をおこなわなければならない。マルクスはすでに、国家と市民社会との関係においては市民社会が土台であるというところを、「家族と市民社会が国家の土台である」といった言い方で明言しております。そして『ヘーゲル国法論批判』草稿の二カ所ので、国家論にはヘーゲル市民社会論の批判的分析をおこなう意図を、洩らしておるのであります。

ヘーゲル市民社会論とマルクス

ところで、ヘーゲル『法の哲学』の市民社会論の分析は、『国法論批判』のような、ヘーゲルの叙述についての逐条的検討といった形では残されておきません。それは、その実質の中身としては、経済学の研究、経済学批判として展開していくわけであります。とはいえ、経済学の批判的研究をおこなうに際して、課題意識と問題追究の視角を、マルクスはヘーゲル市民社会論の批判的検討をつうじて獲得している、といつて過言ではなからうと思ひます。そこで、経済学の出発点におけるマルクスの問題と視角を洗

いたすために、ごく簡単にヘーゲルの市民社会論についてお話ししておきます。

ヘーゲルの市民社会論は、これまた三つの節からなっております。第一節は、「欲望の体系」と題されて、ここでは、分業と交換にもつて商品生産者の社会的連関の深化発展が説かれております。欲望が社会的欲望となつて、交換をつうじてはじめて充足されるものになる。これにともなつて労働も社会的労働となつて、ますます社会的分業の網の目に組み込まれてゆく。こうして、各人は直接の意図としては自分の私利を追求しながら、これをつうじて人間相互の連関、そしてまた自然に対する人間の連関が、ますます普遍化してゆく。「欲望の体系」では、こうした分業と交換にもつてこころの、スミスの「commercial society」、商品生産と商品流通の商業社会として、市民社会が描かれております。市民は利己心にもつてのみならずから労働し、私利所有を獲り、これを必要なく利己心にもつて相互に契約・譲渡しあひ。まさに自由・平等・労働にもつて所有の世界であります。だが、その利己心、特殊の利益の追求をつうじて、その後で、普遍性が、人間と人間、人間と自然の普遍的連関が発展していき、この点の指摘・抽出に、ヘーゲルの眼目があります。

では「欲望の体系」の内部でい

的に發展してゆく普遍性が、現実にはどのような姿をとるかという点、これをヘーゲルは「普遍的で持続的な資財」as allgemeine bleibende Vermögen と呼ぶのであります。これは明らかに、スミスのいう common stock をとり入れたものであります。そして、この「普遍的資財」の分配にどうあつて、そのあすかり方によって「身分」Standes の区別が出てくると申しまして、「農業身分」と「商工業身分」、それに官舎僚の「普通の身分」の三つをあげておられます。こうして「身分」は特殊性の原理が支配する市民社会のなかで、私的利益の盲目的追求を抑制して、身分としての共同利益と個人の私的利益との調和をはかる「媒介的契機」という意義づけを与えられます。さらにヘーゲルは、「國法」もドイツ語では Standes ということばで表わされることを引き合ひにだしまして、「身分」「國會」という用語そのものが、市民社会と國家との本来的同一性を表現している、と論じていくわけです。

こうして、「欲望の体系」の「身分」への取扱い、國家と市民社会の同一性の樹立をめざすヘーゲルにとっては、戦略的な意義をもちます。しかしながら、common stock の分有の仕方によって、階級ならぬ「身分」の区別が出て

くるという議論は、交換と分業にもとづく商業社会としての市民社会把握には取まらなければならない不純なもの、國家と市民社会の分裂の思ひ止めの意図から、恣意的にもちこまれた不純なもの、と言わざるをえません。

さて、ヘーゲル市民社会論の第三節は「司法活動」Rechtspflege と題されて、ここでは、市民社会に内在する普遍性の外的形式的發現としての、法律ならびに裁判の問題が扱われます。そして第三節は「福祉行政と職業組合」Polizei und Korporation と題されているのであります。この第三節でヘーゲルは、次のような文章を記しておるのであります。

「市民社会が円滑な活動をつづけておれば、社会はその内部において人口の増大と産業の發展過程にある。人間の欲望をつうじての人間の連関の普遍化（『社会的交通の發展』）、また欲望充足手段を生産する方法の普遍化（『生産方法の發展』）、この二重の普遍性から最大の利得 Gewinn が得られるために、これによって富の蓄積が増大する。だがこれは一面であり、他面では、特殊の労働の個別化と制約性、そしてこれとともに、こうした労働にしばりつけられている階級の疎離と窮乏が増大する」。——一方における富の蓄積、他方における労働階級の

窮乏と疎離、——ここではじめて、「階級」という用語が出てまいります。さらにこれにつづけて、

「大衆が、市民社会の成員たるに必要な一定の生活水準以下に転落すれば、賤民 (Pöbel) の出現をひきおこし、これにともなつて他方では同時に、少数者の手中に莫大な富が、いさう容易に集中される」。

これは資本制の生産の矛盾、資本蓄積の矛盾の發現、きわめて赤裸々な描寫であります。社会的生産と交通の發展によつて、一方に富が蓄積される。他方、労働階級の窮乏と疎離が深まってくる。これにともなつて、ますます多くの富が少数者の手中に集中されていく。ヘーゲルが「賤民」といふのは、その実、プロレタリアのことにはなりません。

ヘーゲルは市民社会論のはじめのところで、「國家経済学」は多様な個別的事象のうちに轉く必然的法則を追究する、「思想の榮譽になる学である」と申しまして、その代表者として、スミス、セー、リカードの名を挙げておられます。ヘーゲルがこれらの経済学者に依拠していることは明らかであります。しかしながら、右にみた資本蓄積の矛盾の發現の記述という点では、『法の哲学』の四年前に出たりカードの名著『経済学』の原理をささうわまる叙述を与えておるとい

つても、過言ではないでありません。とはいへ、その叙述も、後述ドイツを足場にしながら背伸びの議論でありますだけに、そこには論理的・理論的に、大いに問題がはらまれておると言わなければならない。すなわち、第一に、ヘーゲルはこのような「賤民」の発生、富と貧困の対極的蓄積は、市民社会の本性に「くわない、それにもとる」「外的偶然性」なのであつて、このような事態が生じないためにこそ、「職業組合」やさまざまな行政的施策によつて配慮しなければならぬ、というわけでありませぬ。

市民社会はほうつておけばこうなるから、そうならないように、「身分」と「職業組合」、それに官僚による「福祉行政」をテコとして、「國家」に高まつてゆかねばならないというのが、論理的筋道であります。

さらに第二に、理論的な問題として、ヘーゲルは「市民社会が円滑な活動をつづけておれば、一方における富の蓄積、他方における貧困の蓄積が生ずる」とありますが、どうしてそうなるのか、その内的メカニズムの追究が全くおこなわれておりませぬ。「欲望の体系」としての市民社会は、自由・平等・労働にもとづく所有の世界として描かれておりました。その市民社会が円滑に活動しておれば、貧富の対極的蓄積が発生するとい



学校のまわりに鳥の巣箱をかけている学生たち

う。そう言いながら、こうした事態は市民社会の本性にもとる外的偶然性だというのは、ヘーゲル自身矛盾しておられるわねばなりません。その点はおきまして、どうして市民社会が円滑に運動しておれば、みずから労働するものの貧困・隷属化と、他方、少数の非労働者の手の中への所有の集中が生ずるのか。なぜ、自己労働にもとづく市民的所有の、自己労働の除外・他人労働の所有としての資本家的所有への転回がおこなわれるのか。この転回を媒介する論理が、ヘーゲルには決定的に欠落しています。ヘーゲル市民社会論の第一節と第三節とのあいだには、理論的・論理的な断絶があるといわ

ざるをえない。まさにこの点、すなわちヘーゲルのみならずブルジョア経済学者たちに共通の、自由・平等・労働にもとづく所有としての「市民社会」表象と、しかしその市民社会が現実の運動の展開のなかで、貧富の対極的蓄積と激的な階級対抗を結果しているこの現実との、内的連関を解明すること、この問題こそ、マルクスにとって、ヘーゲル市民社会論の批判的検討をつらじて獲得された、経済学批判の中心テーマの一つであったと申してよからうと思っております。

中心テーマのもう一つは、次の問題であります。すなわち、市民社会の諸矛盾を、どう現実的実践的に克服するかという問題。ヘーゲルは、「身分」「職業組合」「福祉行政」をデコとして、市民社会を国家のうちに包摂止揚し、これによって資本制の生産の矛盾の発現を防止しようとした。このような「市民社会の止揚」のやり方は、論理としても理論としてもマヤカシであることを、マルクスは鋭く掲げます。とすれば、市民社会の分裂性・矛盾の止揚というヘーゲルの問題意識を継承しつつ、マヤカシの結論でなく、首尾一貫した現実的結論をどう導きたるか。この問題は、市民社会の矛盾の構造をどう把握するかということと深くからみあっており、したがって第一のテーマと不可分であります。第一のテーマは、いわば市民社会と資本主義の連関の問題といえるとすれば、第一のテーマは、この連関をおさえた上で、この資本制的市民社会をどう内からのりこえて人間の解放を達成するか、——資本制的市民社会と人間の社会との連関の問題、とでも申せましょう。

ロレタリアートの発生は、ヘーゲルのみならず外的偶然的なことではなくて、産業の発展にもなつて生じる必然的な事態であり、しかもこのプロレタリアートが、市民社会の諸矛盾を克服してゆく現実のない手である。——このような洞察をもってマルクスは、プロレタリアートを主体とする人間の普遍的解放の見地から、市民社会と資本主義の内的構造の追究をおこなっていくわけであります。プロレタリアートの地位と意義にかんするこの予見的洞察こそ、二つのウァ・プロブレムにとり組むにあたっての、マルクスの基本視点であったと言ってよいでしょう。

(未完)

(経済学部助教授
ほそみ・すくろ)

この相互に関連する二つのテーマが、マルクスの経済学批判をつらぬく中心テーマ、ウァ・プロブレムである。このように私は考えるのです。

一八四三年の秋、パリに移ったマルクスは、労働者階級とその運動に接しながら、プロレタリアートこそ人間解放の真にない手であるという認識をもちます。プ

孤独な下宿に醜酔

ニヒリスト

(ロナルド・ヒングリー著)
向井博 訳

陸井四郎

ロナルド・ヒングリーの『ニヒリスト』(向井博訳、みすず書房)は、一八六〇—一七〇年代のロシアの急進的あるいは革命的知識人の物語である。

十九世紀六、七〇年代のロシアには、「ニヒリスト」と呼ばれる特異なタイプの若い一群の知識人が登場する。かれらの多くは髪とヒゲを長く伸ばし(女は髪を短く切り)、青メガネをかけ、長い靴をはき、太い杖を持ち歩いている。かれらは、こうした世間とは一風かわった風体をするので、エスタブリッシュメントへの同調の拒否、体制に統合されまいとする意志を表現しようとしたのである。だが重要なのは、もちろん、かれらの外観ではない。かれらは既存のあらゆる権威の否定から出発したが、やがてかれらの後継者たちは、湧かれたもののように、ツァーリを頂点とする体制の代表者たちに対する個人的テロに突進してゆく。こうしてかれらは、少なくとも、これまでのロシア社会の思想的風土を短期間のうちに一変させてしまうことになる。ツルゲーネフは六〇年代初頭の予言的な問題小説『父と子』の主人公、バザロフに「ニヒリスト」という規定を与えた。以来、ニヒリストという言葉は、この時期のロシア知識人の一典型を指す言葉として定着した。かれは一時代まえの

貴族出身の知識人ではなく、「雑階級」(小地主・下級官吏・下級職者など)の出身であり、それだけ民衆の近くに立っている。かれは自分の外側によそよそしく立っている既存の権威や道徳や思想をすべしりぞける。抽象的な原理も、それが醜悪な現実をいささかも変革するものでない以上、ただ侮蔑の対象でしかない。かれの生活の原理は自分の内なる欲望と性向だけであり、信ずるものがあるとすれば、それは、有効性という点では疑うことのできない自然科学だけである。芸術もかれにはつくりものの給与事に見える。「しっかりした化学者はどんな詩人より二〇倍も有益ですよ。」こうしてかれは否定を通じて世界を全体化する。だがかれは、否定さるべき現象に対することのできる積極的なものをまだ持っていない。「いまは否定がもっとも有効だから、それでわれわれは否定するんです。」そうした意味でかれはニヒリスト——「否定主義者」である。かれはビートニックの先駆、というよりも十九世紀ロシア型のビートニックである。今日のわれわれの時代がそうであるように、歴史のなかには既存の体制のしくみすべてが、すつかり透けて見えたり、まうような時代がある。大状況の政治も、既存のもろもろのイデオロギーも、風俗も、われわれの身辺の日常的現実も、一

つに組み合わさって体制へと統合されてゆくくみ、感傷的にも見てとれるような時代がある。六、七〇年代のロシアもそうした時代の一つであった。ヨーロッパの知識と思想を吸収したこの時代のロシア知識人にとって、ツァーリズム・ロシアは絶望的なまでに後進的で、出口のない牢獄のように見える。西欧では少なくともタタマエにはなっている民主主義やヒューマニズムが、ここでは端的に頭から否定され、無視されている。ここでは農奴制の強固な土台のうえにツァーリの無制限の専制支配がそびえ立ち、ロシア正教の正統と土俗的儀式がこれをイデオロギー的に荘嚴

している。人びとの生活と思想は、農民は農民なりに、自由主義知識人は知識人なりに、この基本構造に規定され、逆にこの構造を支えている。農民は抑圧と愚昧化の装置のなかで眠りこみ、ひとにぎりの自由主義貴族は近代化と改革を無力で無害な言葉で語るにすぎない。こうしてロシアの現実からの脱出路はすべて塞がれているように見える。

「ニヒリスト」に先立つ世代は、ロシアを近代化しようとする立場から、西欧を基準にしてロシアの後進性を批判したが、そうした批判も、それが抽象的であ

テロに突進する否定主義者たち

畜無害である限りは無視、黙殺されてきたし、それがいささかでも毒性を發揮する危険がある場合には容赦なく弾圧されてきた。六〇年代の知識人の新しい世代は、まえの世代の知識人の無力と屈折を目のあたりに見せしめていた。しかもかれらは、まえの世代が手本と迎いだその西欧において、社会主義と労働運動とが西欧民主主義の偽購を告発しつつあることさえ見ているのだ。

だがロシアには体制変革の希望をつなぐにたりの社会階級もその運動も存在していない。体制に対して明確に批判的な姿勢をとっているのはひとにぎりの若い知識人だけであり、その知識人は体制の構造そのものによって民衆から隔絶され孤立している。絶対的な手話りと見えるこうした状況のなかで、これら若い知識人の到達した地点が、既存のすべて——権力も権威も道徳も宗教も芸術も思想も——これらすべてを否定するニヒリズムだったのである。それは状況の産物であり、体制が生み落とした鬼子であった。六〇年代の新しい知識人の旗手であり、二十七年の生涯を駆けぬけるようにして

終えたピーサレフは、バザロフの立場を擁護して書く——「バザロフ主義が病気になるならば、それは現代の病気ののだ。」しかもこの「病氣」は体制の腐敗の進展とともに、ますます悪化していく。バザロフにつづく「ニヒリスト」たちは、やがてもっと大胆にその否定の意志を否定の行動へと純化させてゆく。

ツルゲーネフが『父と子』を書いたのはまだ六〇年代の始めであったし、そのうへ検閲に対する考慮もあって、バザロフを描くにあたって、現実の（そしてもっとのもの）ニヒリストたちのもっとも重要な特徴を書き落としている。現実のニヒリストは、バザロフとは違って何よりも行動的であり、革命であった。かれらはツァーリズムの寡かれた状況のなかでは生きてゆくことができなと感じていたし、自分たちの生き方、息のかたを変えなければならぬと感じていた。そしてツァーリズムに対する批判がただの言葉にとどまっていた限り、それは何らの力にもなりえないことをこれまでの経験から学んできたのである。言葉よりも行動による批判が必要なのだ、と

かれらははつきりと意識しはじめた。

だが革命の主役であるはずの人民が抑圧と愚昧化のイデオロギーに縛りあげられて身動きさえできないとき、いったいどんな革命が可能であろうか？ 人民に近づくための言論を封殺され、集会・デモの自由も奪われているとき、かれらに自分たちの意志を表現するためのどんな行動が残されているか？ こうした状況のなかで、若い知識人、学生たちの孤独な下宿の部屋のなかでは次第にテロリズムの思想が醗酵してくる。かれらは人民から孤立しながら人民の革命を行行しなければならぬ。テロリズムは代行者の手で行なわれ

る革命の代用品なのである。一八六六年カラコゾフによるアレクサンドル二世に対する狙撃は、個人テロの季節の開幕を告げる。ツァーリ暗殺未遂事件は支配者を激昂させ、白色テロの嵐を呼びおこす。左派の二つの合法誌は最終的に発行を禁止され、「ニヒリスト」の拠点である大学は警察の管理のもとで閉圧される。弾圧に追いこめられた左翼の一部では、一八六九年、ネチャーエフの内ゲバ殺人事件が発生する。「ニヒリスト」がその否定の姿勢を保ちつづけようとするれば、かれは

もはやバザロフにとどまることはできない。七〇年代とともに、いっそう行動的で革命的な知識人が登場してくる。

七〇年代には高等教育機関の拡大につれて、知識人の数は次第に増大してゆくが、同時にこれらのいよいよ大きな部分で体制変革のための具体的行動を指向しはじめる。そうしたなかで、多少とも明確な行動のプログラムを持った地下の政治諸組織が次第に成長してゆく。七三年と七四年の夏には、何千という学生たちが、体制変革の原動力と考えられた人民との結合を求めて、大挙して農村におもむく。だが、人民との結合は一朝にしてできあがるわけではない。かれらのくわだては、チギリン反乱などの少数の例外は別として、ほとんど全面的に挫折する。農民たちは他所者の学生たちを誘集の目で眺めるだけであつたし、それどころか学生たちをすくさま憲兵隊の手に引渡し

てしまふような場合も珍しくない。いづれにしてもこの運動は徹底的に弾圧され、大量の学生たちが逮捕、放學、流刑を受けただけであつた。「人民のなかへ」

運動の敗北は同時に大衆路線の敗退となり、これ以後、地下政治諸組織のあいだではテロリズムが主導権をにぎることになる。「ニヒリスト」の後裔たちは、体制の頂点に坐するツァーリと、かれらに対する弾圧の中心的責任者に対する報復のテロに突入していく。七八年、ヴェラ・ザスリツチによるペテルブルク警察總監・レポフの狙撃を合図に、全国でテロの波がツァーリズムを襲う。なかでもツァーリその人に対する暗殺計画は、たび重なる失敗にもめげず、異常な執念をもつてくり返し組織され、一八八一年、ついに七度目に成功する。暗殺者たち五人は数方の群衆の見守るなかで絞首刑に処せられる。かれらの生命とともに一つの

時代が終る。ロシアの革命運動は、かれらとは違った思想、違ったタイプの人びとの手に引きつがれてゆくであらう。

ヒングリーの『ニヒリスト』は、上に見てきた時期の革命的知識人たちの生活と行動を要領よくわれわれに伝えてくれる。著者は豊富な材料を使い、多彩なエピソードもまじえて、ニヒリストたち、テロリストたちの群像を描いてみせてくれる。この点は、これらの人びとの思想について語られる機会は多くとも、その行動について具体的に述べられることが少なかつただけに、空白を埋める意味は大いといえよう。しかしその反面、ニヒリスト、テロリストたちを行動に衝き動かしていった思想的な理由、異常な状況を限界的に生きたこれらの人びとの内面に踏みこむ力が著者には欠けているように思われる。この点は、ニヒリストを

描くときの著者のいささか揶揄的、分別的な立場とも関係すると思われるが、いづれにしても一冊の小きな本に一度に多くのものを求めることはできない。ニヒリストたちの内面と心情の理解は読者がそれぞれに試みるべき課題であらう。

最後に、表題の『ニヒリスト』よりも、原著のサブタイトル「アレクサンドル二世治下(一八五五—一八八一年)のロシアの急進主義者たちと革命家たち」の方が、本の内容を正確に表わしていることを付記しておきたい。

(評者は神戸大学教養部教授 ぐがい・しろう)

(みすず書房・六五〇円)



「朝鮮画報」について

さる五月十日、「朝鮮画報」の創刊十周年記念の祝賀宴において、総聯中央ハイン・ドクス議長は次のように述べた。
——今日のわが国の報道出版物は(中略)

人民性と大衆性、するどい戦闘性と深奥な思想、理論的内容でもって多数の読者の愛と信頼をうけており、革命的出版物の輝かしい模範となつている。——

貧民窟で死んだ娘二人

—高橋和巳の二短編より—

小川富雄

良心を喚起する因子

我々が日常とかく疎ましく感じ、出来れば自分自身がその渦中に在ることを決して望まないあらゆる社会の矛盾に対し、文学を通して、敢然と立ち向かいつつ、自ら渦中の人となり、攪乱し、啓発し続けたのが高橋和巳である。いや、彼の叫喚は死後遺棄されることなくむしろより拡散傾向にある作品群に継承されているので現に啓発し続けていると言える。私が彼の作品を初めて手にしたのもやはり彼の死後であった。私にとって彼の作品は決して愉快なものではなく、むしろ憂鬱さを増増さす働きを有する。人の持っている想念の重さを強調し、増幅させた末に現出するものが面白い筈はない。さらに生硬な文体が追い打ちをかける。ほぼ完全に法律学を習熟して書いたといわれる「悲の器」にあつては読み進むのに疲勞困憊し、全体としての流れを忘失さすほどである。私自身、彼の作品を十全

に理解しているとは言い難く、従つてその書評をやるということは実に僥越である。にもかかわらず試行しようという意志を抑制出来ないのは、高橋和巳あるいは彼の作品の中に我々が見逃している何かを引き出し、良心を喚起する因子が存在するからである。

高橋和巳については多くの人が論じ、その作品の論評もかなりなされてい。ここで、私は「散華」（河出書房）に他の四編とともに取り上げられている「貧者の舞」と「日々の葬祭」の両短編を中心に据え、その外郭となる思想との関連から論じていきたいと思う。

後めたくふりかえる

両作品はともに釜ヶ崎という、急激な経済成長を示す日本の現実とは無縁な歪曲部でありふきだまりである地に居住する最底辺層の人々の生活掬奪である。作者自身、釜ヶ崎に生まれ育ち、脆弱な生活基盤の下で世のあらゆる純善を背負い、極限状態で無意味に彷徨する人々に接触している。彼は別の機会に「生まれ故郷であるドロドロした釜ヶ崎へ墜落して戻つてゆきたい」という欲求があるといひ、「理念として持っているものゆえに緊張度がいつも高いわけだが、それらを投げ出して、通路にドタッと寝ころがって

いるあの最底部のオッサンみたいに、ドタツとしたいという欲望がある。」（「暗黒への出発」と書いてある。彼の作品に於て「釜ヶ崎」は大きなウェイトを占めてい。」「憂鬱なる党派」の一場面でも、そこが舞台となつているのが、野間宏によるところでは、「圧倒的に出てくる釜ヶ崎」というものに飲まれて、それが底なし沼になってそこに底をつくりえない」といふことであり、それが「作品を自然主義的のものにしてしている」ということでもある。（生涯にわたる阿修羅として）一方「貧者の舞」「日々の葬祭」においては釜ヶ崎そのもの、釜ヶ崎に息衝く貧民そのものの生活を一部披露し、前者では貧民窟から疎斥された医者あるいは小学校の女教師が消極的かつ微弱な干渉の手をさしのべながらも依然として疎斥され続ける。後者においては若い故に貧民窟改変策を構じようとし故意に足を拘わられた中年医者の無力な語り形式を採っている。前者（あるいは後者）は後者へあるいは前者との続編であるといひは解釈する。両者間には大きな脈絡は見受けられるが、物理的時間の経過は判然としていない。

医者はその前途を決して光明が射さないこと、独力で貧民窟をユートピアに変ずることが大宇宙のただ一個の星をさがすに等しいということを知つてい

るし、女教師は日々の幸福を掴むのにきゆうきゆうとしている。病根を絶やせようとした者が同じ病に冒された、あるいは効力のない薬劑を控え目に投じているのである。ドロ沼に立たぬに職業上関わりながらも自身の生活を固守するためには構ってられない。あるいは若い頃そのドロ沼に片足を突っ込んでみたが、いち早くもう一つの足の下で地獄沼を見、自身を安全な、何ものも侵し難い場所に隔離するという操作を試みたのであろう。ここに泥沼から抜け出す努力が結果し、学者、そして作家として立った作者の後めたさを感知できる。それは「多くのインテリがそうするように、彼（福留真司）は自由の代償に自分の出身階層を裏切ろうとしていた（我れ関わり知りず）」という一節に表白されている。

貧しい関係、貧しい性

これらの作品にはまた、作者のセツクス観も盛り込まれている。高橋和巳は、「セツクスは人間を下降させる」という基本的姿勢を貫いているが、別に性意識に由来するのではなく、歪められた性が悪である。従って、それを歪める制度なり人間が悪なのである。一定の条件を設定されればその下で正常な性を営むことが出来る、と考える。

「貧者の無い」においては「この前の遠足の前にも青い鞆子を買ってくる約束だったんです。……でも正札を見てるうちに、なんとなくお酒が惜しくなってるの上、あの人がお酒を飲みたいっていうもんだから……。」妹思いの姉が給料日に妹にお土産を約束しながら、男を知った喜びのために金を出し惜み、するすと違約するという話には憐れな真実感があつた。」という部分で、自身の性行為の喜びのために、小学生の妹の心理的、生理的变化に気がかないという事自体、盲目的な性行為によって下降する人間の「サンプルではないだろうか？」他のあらゆる面で十全の配慮をなす姉がその面にだけ落度があつたのだから。また、優等生・妹とみ枝の不純な性への脱落は、歪曲化した制度なり人間の中で身を抗しきれず押し流されていく一個の有能な魂の下降現象である。所詮、精神的物質的貧困から、さし延べられた閃光にも等しい束の間の上昇機運に乗る可能性は全く無いといえる。社会悪人間悪の改善は、制度なり環境なりを再構築する以外不可能ではないだろうか？ ところが鋭敏な頭脳を持ち主とみ枝には貧困から脱出する可能性があつた。しかし賢明であるが故に自力で這い出ることの困難さを視認できた。彼女の二日毎二百円の貯蓄は彼女の売笑行為の代償であるが、彼

女は虚栄心に敵対する物質的貧困を自力で撃退できる唯一の方策であることを、泡盛する性の中から見出していたのである。これは必ずしも彼女の能動的な意志に依るものではなかつたが、「日々の葬祭」においては、貧民街に診療所を設置を試みて相棒の造反により挫折した挙句、妻子からも離反した医者が無意味な人生を呪いつつ生きていく。その医者に患者たる若い娘の生の残照を絡ませる。

この作品で作者は、繁多な罰に餌けが少ないとはいへ比較的裕福な自家の妻子と日々の生活を十分全う出来る、当然若い娘の死期すら火急なものとする赤貧の家族とを見事に対比させている。「私は反射的に憎々しく贅沢に肥えた私の娘を思い出した。次に買うハイヒルやハンドバッグ、婚約者と見に行く映画や芝居以外には、頭の中に何ものもない馬鹿者は、食代は食う程ぶくぶく肥える。」

「『診察代は月末でもよろしおまっしやるか？』……『ああ、まあいつでも結構です』……どうせ私の娘がくだらぬ男に貢ぐんですから。」

吉本隆明によれば、貧困というのは物質的なもの他に観念的なものもある。観念的貧困とは関係の貧困、あるいは関心意識における貧困である。貧困なるものが人間を苦しめるとすれば、本当は物質的貧困に由来するのが関係の貧困であ

る。従って、貧困の観念にひっかかってくる部分というのは非常に関係が貧しいということである。今、彼の説に照らしてみようと、とみ枝及びその家族の相互の稀薄な関係、煙草屋一家の家族の相互の疎通に乏しい関係——この関係の貧困は物質的貧困に由来しよう。両者は段階的なものと思われるが、これらの家族はすでに貧困の極限に位置している。

高橋和巳が、泥沼から這い上ろうとして果せぬ人間を描くということは、それはとりもなおさず這い上つた者と再び泥沼に陥落する者とのコントラストである。

これらの作品は、彼の他の作品に比較すれば、短編であるが故に他に見られる錯綜した人間関係、重苦しい想念相互の熾烈な対決は演じられていないが、貧民窟のおそらく典型であろう二つの家庭の一員の死というものをも克明に描写している。その二人の若い娘の死期を早めたものは、矛盾に満ちた人間社会の根源的な代物であるということをも、我々に芬々臭わせながら……。

（評者は経済学部三回生）
おがわ・とみを

（「散華」河出書房・五〇〇円）



創意をこらすジョンリマ産城機械工場の労働者

キム サリ ヤン
金史良
—人と作品—
(1)

田所信吉

■ はじめに

去年の第六回、昭和四十六年度下半期芥川賞が、李恢成氏の「一匹をうつ女」と東峰夫氏の「オキナワの少年」に決定された。沖繩問題が白熱化している時代的狀況の背景が存在しており、沖繩がただそれだけで対象としての今日的意味を持つている、というその意味において、沖繩出身の、しかも沖繩の現実を少年の眼を通して赤裸々に描いた作品で東峰夫氏が受賞したことは、単に異色というだけではなく、それ以上の時代的狀況的意

味が含まれているように思われる。が、しかし、それ以上に同時に芥川賞を受賞した李恢成氏の存在に、私は多くの意味を感し、その受賞の重さを強く感した。あるいはこういう言い方は李氏には失礼であるかもしれないが、私は李氏の作品は野みとしてはあまり好きではない（今回受賞した「一匹をうつ女」にしろ、かつての「またふたたびの道」「われら青春の牽上にて」等にして）。もちろんこのことは李氏の文学的評価という意味においてではなく、文学的私の好みとしての意味においてである。それにも拘

わらず、今日、私が李氏の存在にひかれ、李氏の存在に多くのことを感じているのは、やはり、李氏が芥川賞を受賞したというこの意味に多くの何かを感じたとらざるを得ないからである。また、李氏が在日外国人であり、在日朝鮮人であるという事実、更には、在日外国人で芥川賞を受賞した最初の人であるということも、李氏に私がひかれてい

る要因の一つかもしれない。が、しかしここでことわっておきたいのは、決して私は芥川賞とか直木賞等の、諸々の文学賞の受賞が、その作家と作品の文学的芸術的価値の表現であるとは考えていないということである。私はむしろ逆に、芥川賞等はマスコット資本と一部の形式主義的權威主義者による、文学の本質的な芸術的評価を抜きにした、形式的な権威づけのための儀式の賞にすぎないと考えているほどである。しかし、それでも向かつ私は李氏の芥川賞受賞に何かを感じざるを得ない。それは何故かと問われれば、明確には答えられないにしても、次のことだけは言える。それは李氏が在日朝鮮人であるという事実、また、そうであるが故に、李氏は日

本人の偏見・差別・蔑視の中で、抑圧され、押し込まれ、追いやられながら日本で育ち、その日本の中で、自分の母国語ではなく、外国語である日本語で作品を書き、受賞したということ。これは一見何でもないようなことであるが、私には重要なことのように思われる。何故なら、日本の風土という、およそ我々日本人にはとうてい理解でき得ぬ、在日朝鮮人への諸々の差別の中で、李氏が民族的苦痛の過程を経て文学活動をしており、その民族的苦痛の李氏なりの一つの展望の試行として、日本語での創作活動があると思われるからである。

日本の多くの学者や知識人といわれる人々は、おそらく、在日外国人が、外国人というただそれだけの理由で、学問研究や文学活動が不可能の状態にあるとは信じていないであろう。誰もが学問研究の自由は日本に限らず、世界の何処でもその自由を保障されているものであると思いついていからである。ところが、実はこれは全くの理念上のことでしかないのである。外国での状況を私は知らないが、少なくとも文明国であり、経済大國であるわが・ニッポンでは、徹底してその自由を認めないものである。なかでもこの日本に最も多く在任し、歴史的に見ても彼らが日本に存在することの責任を全面的に日本と日本民族が負うべき立場

にある在日朝鮮人に対しては顕著である。彼らに対しては学問研究の自由どころか思想・言論・表現の自由や、結婚・就職の自由まで制約を加えられているのが実状である。何の理由もなしにである。

李恢成氏と同様に、現在文壇で活躍している在日朝鮮人作家に金鶴泳氏がいる。金氏は東大の物理学を卒業した後、大学院へ進学し、博士課程をも優秀な成績で終え、卒業後は母校東大で助手として残り、研究活動をつづけることが決定していたところが、いざ卒業となりまさに助手にならんとした時、何の理由もなしに突然助手採用を拒否されたのである。結局理由とは、金氏が在日外国人＝朝鮮人であるということ以外には存在しなかった。

学問研究の世界でこんな馬鹿なことが起きるはずがないと思いたくもなるのであるが、これが現実であり、事実なのである。しかも、これは遠い昔のことではなく、つい数年前のことであった。現在の金氏は食わんがために止むをえず、パチンコ店とバーを経営しながら、日本における在日朝鮮人としての民族的原点を礎として文学活動をつづけている。おそらく、金氏は物理学を専攻した一科学者として生きるべき道を不当にも奪われ、飲屋とパチンコ店の経営でしか生きることを許されなかった日本という国における自己存在の認識過程の中で、自らの現存

在の止揚への一つの方向として、小説を書きつづけるを得ないのではないかと思われる。しかし、ここでもう一つ見逃してならないことは、このような偏見と差別は決して学問研究の領域だけではない、全ての日本の文化状況にだけらがなく、全ての日本においても然りであると言わざるを得ない。

私は先に在日外国人で芥川賞を受賞したのは李氏が初めてであると言ったが、もう一人、本来ならば当然芥川賞を受賞していた作家がいた。それは李恢成氏と同様の朝鮮人作家、金史良である。しかしそれは朝鮮が植民地統治下という社会状況故に差別と偏見の蔽らされた戦前であったために、彼は芥川賞候補になりながらも受賞できなかった。

僅か二三才で「光の中に」で芥川賞候補になった朝鮮人作家、金史良についてはほとんど知られていない。その名前すら、私たちが戦後生まれの若者の世代は知らぬのが実状である。しかし、金史良の名と作品は心ある文学者や、心ある文学研究者の間では読まれたつづけて、評価されてきた。が、それは圧倒的少数であり金史良についてはほとんど知られていないと解する方が妥当である。金史良が多く、若い読者層に知られていない理由は、多くあると思われるが、その一つには、

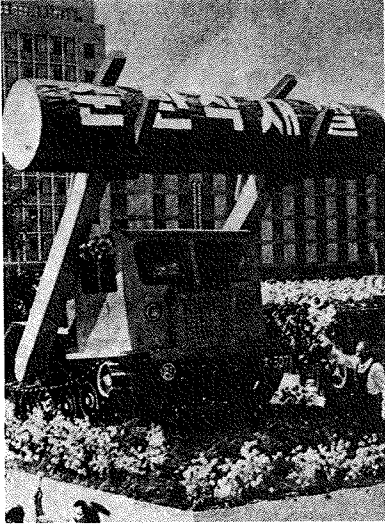
金史良の文学活動の期間が短かったこと。それも戦前であったこと。更に、僅か三六才の若さで、一九五〇年、朝鮮動乱の最中、祖国朝鮮の何処とも知れぬ何処かで、人知れず祖国解放の闘いで戦死したというその生涯の激変と故の短命が起因していることだけは確かである。

そして、更にもう一つの理由には、金史良の文学の歩みが、日本帝国主義の植民地支配体制への抗いの歩みであったことが結果しているように私には思われる。何故なら金史良は、当時の苦悶な時代的状况の中で、自己のおかれた運命に絶望することもなく、絶望のうちにも闘志をかきたてて闘いへの道を選んだからである。闘いの相手は観念上では日本帝国主義者であったが、現実的には日本人と日本民族とならざるを得ず、しかも軍部からの圧力のため、自らの筆をも曲げるように強要され、その曲げた筆を待ち望むブルジョワマスコミとも金史良は沈黙の闘いをせねばならなかった。これらのプロセスとして、少なくともまだに朝鮮民族への偏見と差別、いわれなき蔑視が公然と行なわれている日本の風土と文化状況、低俗な民族意識が日本全般に反映していることが考えられるし、この日本の戦後文化の反映の中で、ある一つの紙魚と思われる日本における在日朝鮮人への対応が、金史良の文学を評価しきれな

い、否、避けて、評師の対象としない理由であるとするのは、あるいは私の僥倖であるかもしれないが、私にはそのような思われて仕方がない。

(1) 金史良の文学への歩み

金史良は本名を金時昌といい、一九一四年（大正三年）三月三日、平壤府陸路里一〇番地に生まれ、一九五〇年（昭和二十五年）秋、朝鮮戦争の砲煙やまぬ最中、いずこもしれぬ祖国の山野で三六才と八ヶ月の生涯を閉じた。



ポチョンボ戦闘勝利35周年記念パレードでの
林業労働者のデコレーション

に、文学を通して抵抗を試みた朝鮮の作家、詩人は少なくない。プロレタリア文学運動にたずさわった者、民族主義作家の活動、純粹に芸術的動機にもとづいて活動したものの等、いずれも自己の置かれた立場に抛り、抗しがたい民族の怒りに燃え、敢然と日本統治権力に立ち向かわざるを得なかったのである。しかし、その抵抗の道は平坦な道ではなく、文字通りの苦難の道であった。

金蓮壽氏の小説『玄海灘』の次の一節が如実にこのことを示している。

「彼らには三つの道しか与えられていなかった。肩をあげて前へ出るか、眼をつぶって絶望するか、へこへこと妥協し

『降伏し裏切る』かの三つの道しかなかったのだ……」

このことは、朝鮮の作家たちが三つの道の中のいずれかの道を選択しなければならなかったことを意味すると同時に、朝鮮の作家たちが民族の解放と独立の情熱をあらゆる面で時代的な苦闘の中に持ちつつも、それを喪失せしめる時代の社会的、ひいては個体的背景に微妙に揺らめいていたことを意味する。しかし、朝鮮の作家たちは、この揺らめく中で朝鮮民族として、ひいては民族の作家として自己形成をはかり、そのアイデンティティを追求しつづけたのである。

これらの朝鮮の作家の中には同密在在に在学しながら民族の抵抗の道を歩み、殉難者として福岡刑務所に若き生命を散らせた詩人、伊東柱がおり、一七回におよぶ投獄体験の果て四一才にして獄中に逝った北京大学出身の李陸史がおり、鉄窓につながられる身で祖国解放の黎明を迎えた早稲田大学文学部出身の金瓊燮、徴兵を畏避するために智異山中をさまよひ、餓死寸前に民族の再生の日に接したという、東京アテネフランセに学んだことのある險巖五等がいた。これらの多くの作家の中にあって、民族主義作家たる自己形成をみごとになしとげ、こころざした道を貫きとおした一人として金史良の生涯は実にユニークであるといわざるを得

ない。

金史良の家は経済的には彼が日本へ留学するにさしたる困難のない、平壤の文官を出す旧貴族階級でブルジョアであった。彼の母はアメリカで教育を受けた熱心なクリスチャンであった。その頃の朝鮮では上流階級はアメリカで教育を受け、中流の上階級は日本で教育を受けるといわれていた。だから、常識からいっても、金史良の日本留学（一九三一年）昭和七年冬、彼が平壤高等普通学校（中学）五年の時）と前後して、京都帝國大学に兄の金時明が留学し、妹の金五徳が東京の帝國女子専門学校を経て、京城の梨花女子専門学校に行っていることはその生家がはなはだ寛裕であったことを物語っている。また、金史良自身はクリスト者ではなかったが、母や姉が敬虔なクリスト者であったということは、彼の倫理的骨格を形成するにあたり重要な意味を持つ。何故なら、当時の朝鮮における宗教的一件事にクリスト教は積極的な意味を持っていたからである。というのも一般に朝鮮のクリスト者は、異民族の侵略によって祖国が滅亡するのはまちがっており、滅亡からそれを救うためには生命を賭すことも許してはならないと考えていたからである。ことに他民族を侵略する行為こそは、神のまえに罪を犯すことにはかならないと断定した。その結

果、彼らは自己の民族が異民族によって奴隷に等しい境遇に追いやられるのは死にもまさる罪惡とみなし、民族解放のために立ちあがることこそは神によって与えられた聖なる義務とこそえ、独立運動に走ったのである。当時の独立運動の志士には少なからずキリスト信徒がいた。キリスト者かその信仰故に、民族文化と歴史の抹殺、ひいては民族そのものの存在を脅かす統治権力に対して有形無形の抵抗を試みたのはこのためであった。だからこそ、金史良がキリスト者の家庭に育ったことは深い意味を持つ。つまり、彼の家族がキリスト教を信仰したことにより、家庭環境をより反日的、つまりは民族主義的なものとしていたからである。これが彼の性格形成におよぼした影響ははかりしれず、決定的なものであることは疑いないことである。

以上のような家庭環境下に育った金史良のもとに、一九一九年、光州から六里ほど離れた暹州駅で通学のために列車を待っていた朝鮮人女学生を、日本人中学生「名が囁弄した」この事件は、日朝学生事件が起きた。この事件は、頃頃から朝鮮人学生たちの心にうっ積していた反日感情に火を注ぐ結果となり、やがて抗議デモに発展し、百余名の検査者を出すに至ると、学生方だけではなく、父兄はもとより、朝鮮民衆をもこれに巻き

こんでいった。検査学生の即時釈放、民族差別反対、植民地奴隷教育反対などを唱える声は、出動した軍隊一個連隊が光州を戒厳令下にお出したことにより、いったん鎮まったかにみえた。しかし、この抗議はやがて、日本帝国主義打倒、朝鮮の解放などを求める叫びとなって、その年の末から翌年にかけて朝鮮全土に広まっていた。つまり、大学から小学校に至るまで、一般民衆を含む民族的反日抗議行動へと発展していったのである。当時金史良は平壤高曹一年であったが、少なからずこの事件によって刺激されたであろうことは疑いのないことである。この事件の三年後、一九三三年十一月、つまり、金史良が平壤高曹五年の二期期のこと、金史良らは配属校の排斥運動をおこない、同門併校を断行したからである。（当時は理容校配属令がしかれ、中等学校以上に現役軍人が配属されて軍事教練がはごとされてきた。）これがもとで金史良は補習学校処分をうけ、それがため、彼は一九三三年の十一月、ひそかに日本へ留学した。ひそかに留学ということは、金史良が単に中心人物もしくは主謀者として追求をうけていたからである。当時、すでに渡航証明書制度があり、水上警察署の検印をうけなくてはならなかった。それも官憲の厳しい監視の中を朝

鮮人なるがために日本人とは全く異なる、牛馬に等しい扱いをうけながら乗船しなくてはならなかった。このような厳しい状況を免破するため、金史良は当時京都の大学に留学していた兄に電報で救いを求め、同志社大学の制服・制帽・学生証までとりそろえてもらい、日本への密航に成功した。

かくして金史良は九州に渡り、兄の母校でもあった旧制佐賀高等学校に入学した。一九三三年（昭和八年）のことである。佐賀高等学校在学中、金史良は努めて目立たぬように振舞ったようである。一つはその渡日の原因がきわめて政治的性格の強いものであったこと。二つには、高等学校在学中は秀才の名をほしいままにし、教師たちの信頼と寵愛をうけていた金時明の弟ということで注視されていたせいもあった。もともと彼自身大学へすすんでからバリバリやるようであったようでもある。この頃金史良の情熱は、もっぱらサッカーに向けられていた。しかし、高等学校の卒業記念誌に、「荷」と題した掌編小説ともいうべきものを発表していることは、この頃すでに作家への道を志していたものとして留意しておいてよいと思われる。

一九三五年（昭和十年）四月、金史良は東京帝国大学文学部に進み、ドイツ文学を専攻した。その翌年五月、友人たち

と語らい、同人誌「堤防」をつくることになった。これには現都立大学附属高校教諭鶴丸辰雄、佐賀大学教授中島義人、毎日新聞編集委員沢開進、新谷俊郎、梅沢一郎がいた。これからもなくして金史良は下宿を三鷹のアパートから本郷の角田館に移した。この下宿の隣室には霜多正次がおり、隣接の下宿にいた梅崎春生などが、第五高等学校出身者を中心とした同人誌「香港地」の活動をはじめたのは「堤防」のそれと種を接していた。当然、「堤防」と「香港地」の間には交流があった。ほかに「堤防」は、北川冬彦・井上良雄・神保光太郎らの「鯉鱈」三波利夫・小山秀夫らの「作家群」、「リアル」・「翰林」、「白雲文学」、「文壇」等と交流があった。

経費の都合上、隔月発行をきめた「堤防」は、一九三六年（昭和十一年）六月の創刊号を皮切りに、翌年六月までの一年間に五号まで出された。当時の時代的背景は、この年の二月、皇道派青年将校らのクーデター計画、つまり二・二六事件が起き、東京が戒厳令下に置かれたり、メーデー禁止、思想犯保護観察法発布、講座派学者、左翼文化団体関係者のいっせい検査等、趨勢は日本の進路がいよいよファシズムへと突き進んでいる。「堤防」という同人誌名の由来は、この人類の非道なるものの横行を許さぬためにつ

けられたのである。通巻五冊の「堤防」に発表された金史良の作品は創刊号に発表したエッセー「雑音」と、創作特集号である「号に載った小説「土城廓」、四号所載の「暮われの詩」などであった。ただここで留意しておくべきことは、好評を得た「土城廓」の発表後、同人の新谷俊郎と金史良は、当時の進歩的な学生がよくやっていたセツルメント活動が原因で、本郷の本富士警察署に検挙され、

三ヶ月以上も拘留されたことである。もっとも、検挙されるに至ったには、他方で彼が朝鮮芸術座に関係したためでもあった。朝鮮芸術座は、プロレタリア文化運動として、在日朝鮮民族の演劇運動を遂行し、日本に在る朝鮮人の文化的（演劇）要求を充足し、同時に朝鮮の進歩的演劇の樹立を期することを目的として活動していたからである。

（23号につづく）

理論社刊 金史良作品集（全） 価七〇〇円

（文学部哲学科四回生 たとろ・しんきち）

収録作品
土城廓・箕子林・尹主事・山の神々・草深し・光の中に・天馬・天使・親方コブセ・無窮一家・海が見える

（参考文献）

岩波新書 安学植著

次号予定（22号—10月発行）

- 講演記録
- ◇ 経済学批判と弁証法（下）
- 書評
- ◇ 三木清論
- ◇ カミュ—「幸福な死」
- ◇ 知られざるレーニン
- ◇ 日本列島改造論について
- 特別寄稿
- ◇ 田木繁のこと
- わたしの研究ノートから
- ◇ 数人の教官による軽妙な筆さばきの作品群

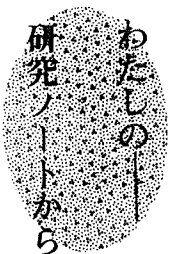


日中文化関係史の一面



Ⅲ

増田 渉



小百科辞典ふうの『智環啓蒙』

『翻刻智環啓蒙』は、慶応二年（一八六七）に「江戸開物社」で訓点翻刻したもので、私の所蔵するものには「英華書院書之印」と朱印が押してあるが、どこも薄校かヘッキリしない。この書は西洋知識の初歩を、二三題に分けて説明した小百科辞書ともいへべきものだが、百頁ばかりの小本で、各頁上段には英文、下段にはその漢訳文を併載している。序文は英文であって、その末尾には「I.L.と魯名」名されている。「I.L.」とは「Ians Leong」の略で、漢字名を理雅各という香港にいた英人算教師である。理雅各は

中国の古典『書経』『詩経』『春秋左氏伝』『礼記』を英訳した人として知られるが（はじめ香港で、後には理雅各の故郷スコットランドに招かれて、これらの英訳の専業を助けたのは王福成である）、この『智環啓蒙』は Baker という人の「The Circle of Knowledge、(Gr-dation 1.)」を理雅各が「智環啓蒙塾課初歩」と題して漢文に訳し、香港の「英華書院」から出版したものだ。その同治三年（一八六四）の再版本（初版は序文によると一八五六年）を、そのまま英文もつけ、漢文には訓点して翻刻したもので、訓点者は奥付に柳河春三とある。

原本の跋が、翻刻本にも訓点つきで載せられているが、それは任瑞図が丙辰（一八五六）の冬に書いたものだから、初版本にあったものである。この跋文に任瑞図は「理雅各先生はヤソ教会の牧師で英華書院の教授である」といって、「余、甲寅の歲（一八五四）より西席に居るを恭くす」といっているから、任氏も「英華書院」の教師をしたわけだ。そして理雅各の人がや勉強ぶりをはめてから、「この『智環啓蒙』一巻を訳して、以て生徒に授く」といっている。だからこの書はもとと「英華書院」の教科書として、英文の学習と兼って西洋知識の啓蒙とキリスト教の宣伝をはかったものであることが分かる。この書の内容について

では「上帝の体性効用から、以て（上帝）造るところの天文、地理、人事、服食、器用に及び、かの一の飛滑動の物とともに、悉く載せざるはない」と任氏はいっている。ただし「上帝の体性効用」は、最後の第九十一課から第三課までになっていて、その他は「身体論」・「飲食論」・「居所論」・「教諭論」・「生物乳哺類論」・「水禽論」……「草木論」・「地論」・「植物質体論」・「天語諸天論」・「地球分枝論」・「人生会祭同居等事論」・「國政論」・「大不利難以外別國論」・「遊商貿易論」・「物質及移動等論」……「五官論」・「上帝体用論」等、二十四の部門（Section）に分け、その各部門について更に幾つかの課（Lesson）を分けて説明を加え、それが全部で二百課ある。ただ「論」といっても、中国ふうだったままで、実際には解説とか説明とかいへばいいものである。原題の Human Beings を「人類論」や The Body and its Parts を「身体論」としたり、すなわて「論」の字を加えて、例えば第三十二課の「律の器論」は、原題は The mechanical Powers である。

新聞雑誌の開拓者、柳河春三

訓点者の柳河春三は幕末の洋学者（明

治二年(戊辰)で、幕府の「開成所」の頭取をこめ、オランダ、フランス、イギリス、ドイツの各国語に通じたといわれる。将軍家の侍医(奥医師)で蘭学者であった桂川甫周の息女、今泉みねの「名じりの夢」(昭和十六年、長崎書店、後に昭和三年、平凡社「東洋文庫」)の最初に出てくる人物だが、柳河について詳しく調べたものに尾佐竹猛『新聞雑誌の創始者柳河春二』(昭和十五年、高山書院)がある。慶応二年『西洋雑誌』を、同四年『中外新聞』を発行した柳河の功績を重々評価して、このような題名にしたものようだ。ただ念のためいうならば、独自の新聞、雑誌が、国で発行される前、既に文久年間、和蘭領バタビヤの蘭字新聞を翻訳した『バタビヤ新聞』とともに、咸豊七年(一八五七)から上海で発行されていた『六合叢談』(主筆は倭烈 equal 力)に訓点をつけてわが国で翻刻したことを忘れてはならない。小池汪一郎『日本新聞歴史』(明治十五年、巖々堂)の冒頭に「新聞紙の我日本国に始りしは、文久三年の秋、江戸本所の一商店、万屋四郎なる者が発行せし『バタビヤ新聞』(実は文久二年)及『六合叢談』を以て濫觴とす」といっているが、『六合叢談』のほか、咸豊八年から寧波で発行された『中外新報』、同治元年(一八六二)から上海で発行された『中外雑誌』

咸豊十一年(一八六一)から香港で発行された『香港新聞』が、やはり文久年間(いずれも「官版」として翻刻され、万屋兵四郎によって発行されていることは『博物新編』翻刻本などの巻末広告に見えている。ただし翻刻ではヤソ教関係記事を省いている。私は冊子になった『六合叢談』(巻一・巻十三)、『中外新報』(第一号・第八号)、『中外雑誌』(第一号・第七号)を所蔵する。いずれも完全な部数ではないが、また日中文化関係史の一面を具体的に見る資料といえる。そしてこれらが幕末のわが国に、海外情報を提供し、啓蒙する媒介の役をもったことを知らねばならない。例えは橋本左内は『六合叢談』(翻刻以前)から「泰西近事紀要」、「印度近事」、「金陵近事」(太平天国の情報)、「粵省近事述略」(阿片戦争の経過記事)を筆写している。さて尾佐竹氏の右の書には、柳河から『智環啓蒙』の翻刻として、桂川氏に宛てた手紙の一部が引用されている。柳河は『友人の成島柳北(幕臣の役人で維新後は新聞記者)、『朝野新聞』社長)が再版本を所蔵し、それが初版の誤りを一、二カ所訂正している。この方を翻刻には使うがよいと思うから、取り換えようといっており、取り換えたら早速かえり点を付け、そちらへ廻すから、く

れぐれも御骨折下さるべく候」と頼んでいる。柳河は、このようにして再版本に廻って訓点をつけ、桂川氏の骨折りでこの書を出版したことが知られる(奥付に、「差兌大和屋書兵衛」とある)。

「的」を借りてきた話

柳河には『フランス文典』、『イギリス日用通語』、『洋學便覧』そのほか洋学関係の著書が多いが、漢文にも相当通じていたようで、尾佐竹氏の書に、柳河がわが俗語を漢訳した戯詩がいろいろ引用されているし、『智環啓蒙』訓点本のほか、前にあげた『格物入門』の和訳(二十冊)にも参加している。ただしこの『格物入門和訳』は数人で分担、仮名まじり文に訳したものが、その『木学の部』(二冊)が柳河の担当である。

ついでにいえば、柳河等、明治初年の洋書生たちの訳語で、今日なおわれわれが、その恩恵を蒙っているのは、名詞「的」の字を加えて形容詞あるは、副詞に転化してつかう便利なやり方である。明治初年によく翻訳をしたのは「柳河春三、桂川甫周、黒沢孫四郎、筑作奎五、熊沢善庵、其他某々等であって、拙者なども加わって居た。そうして」と大槻文彦がいつている。「不思議なことには、此中間が、大抵寺那の小説『水滸伝』、『金瓶梅』などを、好んで読んで居た。或

る日、夜合つて雑談が始まつた其時一人が、不図、かような事を言ひ出した。System を組織と訳するはよいが、Systematic が訳し悪い、ticus 後加え(接尾詞)は、(中国)小説の的の字と声(音)が似て居る、何ん組織的と訳したらば、どうである。皆々、それは妙である、やってみよう。やがて、組織的の文で清書させて、藩邸へ持たせて、金を取りにやる。君、実行したのか。うう。それはひどいではないか。何に、気がつきませぬよ。などという戯れであったが、扱此的の手で度々必ずかしい処が切り抜かれるので、遂に嘘から真事というようになる。後には何とも思わず、遣うようになって、人も承知するようになった云々(大槻文彦『復軒雜著』明治三十五年、広文堂書店)。

教科書、啓蒙書として
大きな役割を果たす

『啓蒙知恵丹瓊』(三冊)は明治五年の初版というが、私の所蔵するものは明治七年の第四版である。これは所々に図を入れて、平かな漢字交りで『智環啓蒙』を和訳したもの。「於菟子訳述」となっているが、於菟子とは瓜生寅で、上巻の最初に文部少丞 長三洲の序文がある。そのなかで「瓜生君とは同僚なり、同じ

台湾ノ一ト二章

市原亮平

耕者有其田と霧社事件

(一) 耕者有其田

も十年も昔のことになりましたが、私が人口論の講義を終えて廊下に出ると日本語のまだたどし一青年が、話をしつた。彼は台湾からの私費留学生で、人口論を学ぶためK大にはいったが、その講義がないため他学の私の講義をき

かして欲しい、というのです。私は快諾し、ゼミナルにも参加を認めたのですが、それから二年間、毎週講義の最前列に同君の姿をみないことはありませんでした。同君は真摯に人口論を攻めた結果台湾の出版社からすでに二冊の本を出版するまでになっています。拙宅を訪ねる彼から台湾の人口や経済事情をきくたびに、年来の台湾熱―調査・研究への情熱

がわきおこってきました。五年前の春休みを利用して、私は特筆の此地を訪ねましたので、今日はその目録のなから一、二の收穫をひろい出してみたいとおもいます。

私は、経済学徒として山田盛九郎「日本資本主義分析」という名著から大変な学思をうけていたので、戦前の研究・思想不自由時代の故かも知れませんが日本資本主義不可欠の再生産軌道の一環としての植民地経済―台湾・朝鮮問題には一言もふれられていません。私は日本資本主義の再生産軌道を補充する意味で、植民地台湾に対する旧罪を謝するとともに

くともに學制を議す」といい、「君、問にその記述するところの『啓蒙智慧環』を出示す。方に小學生徒の読書に宜しきものなきを憂うるとき、(中略)この書は尤も今日必用たり、因って急に之を刻して以て天下の小學生徒に恵まれんことを發願す」といっている。そして「知を聞き、蒙を弊く効、豈ただ小學生徒のみならんや」ともいっている。当時、文部省の役人であった瓜生氏が、これを平易に訳述して、初歩的な西洋知識の普及に資せんとしたもののようだ。そしてこの

『智環啓蒙』がそれに値する効果をあげてに違ふと考えたのであろう。ただしこの訳述書は第百九十一課で終わり、原本最後のところ、ヤソ教皇の各體は削除しており、そのほか原本にはない「日本の論」を第百四十四課に入れたとか、「通貨論」で、原本では中国及び英國の通貨を説明してあるのを、すべて当時の日本の通貨について説明したりしている。この訳述本はかなり物迎されたらしく、明治九年ごろ第五版が出ていたという。『智環啓蒙』の日本版(訳述も入れて)

を収集、調査した小沢三郎氏の『智環啓蒙』と耶蘇教(『羅米明治耶蘇教史研究』所収)によれば、柳河本のほかに、英文を削った漢文訓点本が、明治三年に沼津学校で、同じく英文なしの漢文訓点本が同年に鹿兒島藩で翻刻され、また出版年代不明の英文なし漢文訓点本で、咸豊七年の初版本に拠ったものもあるとい

ものもあるという。

小沢氏の調査した「日本版の流布」によると、『智環啓蒙』は田辺漢、徳島藩福井藩、延岡藩、名古屋藩などで使用され、『啓蒙知恵乃環』は埼玉県、東京女学校、京都府などで小学校教科書として使用された。この書が初歩的な西洋知識の啓蒙書として、あるいは英文教科書として、明治初年のわが国に、新しい文化的開発を媒介した功は、高く評価されねばならないだろう。(文学部教授
ますだ・わたる)

に、今日の傷跡をも確認したかったのである。

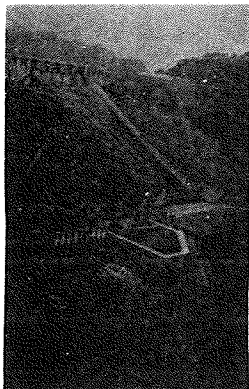
まづ第一に私の関心は、しばしば上がらないし外からの土地改革のインテキ性をしめすものとして引合いに出される台湾の戦後の土地改革——日本の土地改革はひと頃の「正統」農経字者によってインテキ性がいわれたのですが、台湾のそれも、例えば王育徳「台湾」によってそのインテキ、ベテニ性がいわれています——の実態把握におかれましては、

台湾の国民党はいまなお採文であり、彼の民族主義の影響もあって、戦後アメリカが多くのドルをつぎこんでも産別制限がなかなか普及しない、と台中の産制センターの人がいっていました。土地改革もお国父の「耕者有其田」をモットーにし陳儀を責任者にしておこなったといわれますが、内実はアメリカの内面指導があり、日本土地改革を指導したラデ

ジンスキーの参劇もあったと云います。

二・二八反乱の翌年、大陸から逃れてきた国民党権力は自らの腹を痛めることなく台湾地主に小作米の供出を命じ反抗すると投獄し、「收購大庄戸余糧」制をおこなない。つづいて一九四九年に「三七五減租」をやり、六〇%にも達したといわれる小作料を一挙に三七・五%にひき下げ、一九五一年には「公地放領」で日本人からの接収地を小作人に払い下げるように、一九五二年には「耕者有其田」条令を公布し、地主は二申の保持以外は強制的に土地を賣上げられる。実物土地債券（十年償還）をうけとることとなつて、階級としては消滅してゆくのです。

W・ラデジンスキーはかつてアメリカ農務省対外関係局におり、終戦後は東京の連合國最高司令部付きとなつて日本土地改革を指導したのですが、一九六四年、「アジアの土地改革」なる論叢中で、アジアの土地改革がいかに困難であるかについて、次のようにいっています。



陳儀のメリット 石間ダム

「アジアでの改革運動の結果は決して一様ではない。それは最も広い意味で完全に履行された日本や台湾から、実際に多

くの土地が再分配されたのに、その結果は満足すべき状態からは程遠い韓国、あるいはまた基本的には土地改革は実行されたが、それが結果する以前に内戦にま

きこまれてしまった南ヴェトナムにいたるまで、全領域におよんでいる。彼らは「日本や台湾はアジアにおける非共産主義的改革の元祖」として反共の防波堤たる小農創出の成果を誇っているのであると言ひ、私もまた台湾農村の一部を視察してラデジンスキーの言を再確認せざるをえなかったのです。改革の結果、農業生産力はいちじるしく引上げられたのですが、耕地面積の細分化や政府の米穀強買上げ等々が都市と比較しての農村の相対的貧困化を強めているようです。

台中のホテルで見聞したのですが、昼間から酔歩する日本人観光客の遊治の対象にされている少女は、ボーイのいうところでは近郊農民の貧しい娘が家計を助けるため春を売るのだ、というのです。しかしこれを以て土地改革の無効をいうのは空論でしょう。現に、私を石間ダムの見学に連れていった一台湾インテリは、このダムの竣工責任者が土地改革のそれと同じ陳儀であり（ダムの写真・第一）彼が蔣介石の後継者を以て目されていたのに急逝するや、追悼式に全土から野良着の農民が旒香に集まり嗚咽の音が式場に溢れたのです、と私にかたりました。

(二) 霧社事件

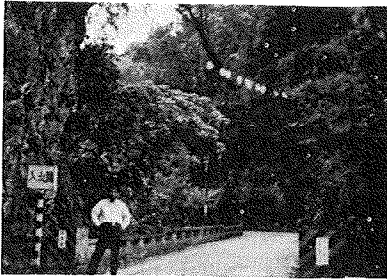
台中で産制問題につき話したあと、タクシーを駆って約五時間、険しい山路に冷水三斗を浴びる思いで霧社の高地を訪ねました。一九〇〇年日本統治に抗して少数民族高砂族が蜂起した有名な霧社事件を現地にみわたったのです。——日本の台湾自領以来、日本軍や警察、日本の公社等の圧迫と土地とりあげは、平地からやがて山地にもおよんできました。一九〇六年総督府内に「理蕃課」がおかれ高山族討伐がはじまるのです。一九一五年頃には殆んどの高地人部落が帰順したので「討伐」は「撫育」策にかわり、学校・診療所・産業指導所を設け、日本語とともに「皇威」を強要しひろげてゆきました。

一九一九年から霧社では小学校の建築道路・橋の工事など重い労役が課せられしかも個人の苦力の半分の日当しか支払われなかつたのです。日本人監獄のムチの下で酷使された彼らのリーダーはモーナルダオであり、彼の妹は「撫育」の一環としての日本人警官との結婚強迫の犠牲者でもありました。苦役のこと、低賃金のこと、モーナルダオの妹を日本人警官との結婚のこと、そして積年の台湾統治の矛盾が背景にあつたようです。モーナルダオの息子タダオモナーが現地駐在

の吉村逋査の非礼のため彼をなぐり倒し、これを報復をおそれたことが発火点となりました。

一九三〇年十月朝はやく連日運動会がひらかれようとした折、霧社中学校内の日本人二三四名を高山族が襲い殺害しました。当時、霧社在任の日本人三三戸、一五七名、それに参観者をくわえ二七七名。事件直後台中州の州下警察官一七八名が高井部隊、台中部隊をくわえ千余名が機関人止園（写真第三、霧社の要点）をこえて侵入、以降一ヶ月にわたり飛行機と海ガスとで包囲・攻撃をくわえ、セ

ii 人止園



「ナルダオ、タダオモ」は自殺し、一〇〇〇名近い自殺者・戦死者を出したといわれています。生き残った者も軍法会議にかけて殺されたり、奸計にあつて連行されたまゝ置らなかつたりした者も多いといわれています。事件は中国大陸につたえられ、各地で抗日集会がひらかれ、日本でも無産政党代議士として河上丈太郎、河野密氏が現地調査をおこなつて「改造」

「霧社事件の真相を語る」と題して「霧社事件が民族問題であることを明らかにしましたが、第五九議会で浜田国松議員（この人は寺内陸相との割離問答で有名です）が「……今回は三千人、四十人と蕃氏みずから窮迫のあまり首をくくつて絶死するという窮境にまで追いつめられたということは、果して官制第三條の必要の限度であるかどうかであるか。……いわゆる酒樓の防衛の程度を越えて積極的に討伐をせられたから、ここに蕃人の一部が衣食の求むべきところなくして、餓死にかえてみずから三、四十人ずつ集団となつて首をくくつて死んだという事実がある。いかに治安維持の必要でも、抵抗力を失うた婦女小児一団となつて首をくくつて死なしても、拓務大臣は陛下に責任がないか。」と日本内閣政府の責任を追及しております。

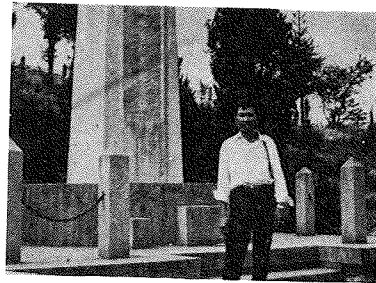
私はたまたま霧社の再訪問には高雄で知り合いになつた戦時中の台湾少年工（

私が逢つたときは輪タクの運転手でした）

を案内役にしておりましたが、彼は部落内でのリーダーで、戦時中「高橋勇部隊」にたつた現地人をさかして連れてくられました。ガイドの台湾人もこの高地人も随分と日本語が上手で三人で恩讐をこえ、半日語りあいました。彼らは私を一つの記念碑に立てゆきました。田義勇隊士は白く脱状に光る濁水溪の流れを見下しながら、海抜一〇〇〇メートルの風圧にとまどき舌をときらせながら、碑の由来をなかつてくれたのです。霧社事件後、日本側が立てた慰霊碑は戦後国民党政府が撤去を命じたのですが、高地人は知らぬ顔でいまは雑草に包まれ、碑文字を塗りつぶしたまゝ残っています。いま

一つの記念碑は戦後蔣介石によつて建てられたもので「霧社起義山胞抗日起義記念碑」と銘文があり、除幕式には蔣介石以下国民党幹部が来社したといふ。（写真第三、碑前の人は旧台湾少年工のガイド）彼ら二人ともこの起義記念碑に冷淡なので、私が「イス去り、フタ来たる」ですか、といひますと「二人とも「あなた」はフタでもイスでもない、よき隣人です」といつてくれたはすが、日本人への旧怨を思い出したのか表情が曇りました。三人で霧社国民学校内の蔣介石の胸像をみてみると、校児が三々五々私たちをとりまき、サクラサクラの歌を

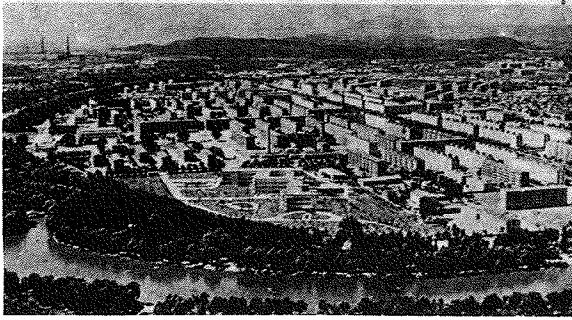
iii 霧社の抗日義軍碑



うたつてくれました。彼らは「人止園」まで私をおくつてくれましたが、私はふたたびイスにもフタにもなるまいという民族の願いを胸に、事件死者の鎮魂を折つて手をふりつづけました。

怨念のしじまを守るや霧社の石文
山胞の子らと布ふりて別れし

（経済学部教授
いちばら・りょうへい）



ピョンヤンの勤労者住宅街

新感覚の編集委員募集

何よりも大事なものは、個人の「やる気」です。これが出発点です。この、目に見えない、数で計測できないものを、われわれの内部に燃やしつづけるための一つの手立てとして「書評」誌

があると思います。だから

この「書評」誌はどんな時にあっても、緊張し燃えていなくてはならないのです。みずみずしく常に躍動しているものにするために、われわれは新しい人材をも

ユニークな内容にしよう

っともっと求めています。編集の仕事には限度がありません。企画にしろ、印刷にしろ、対外的交流（配布）にしろ、まだまだ新しい方法があると思います。

新しい頭脳をもった新しい編集委員を求めます。

もちろん、皆さんの個体表現としての原稿をも募集しています。

生協の三階までおいで下さい。

《係より》

ピリットとした原稿募集